



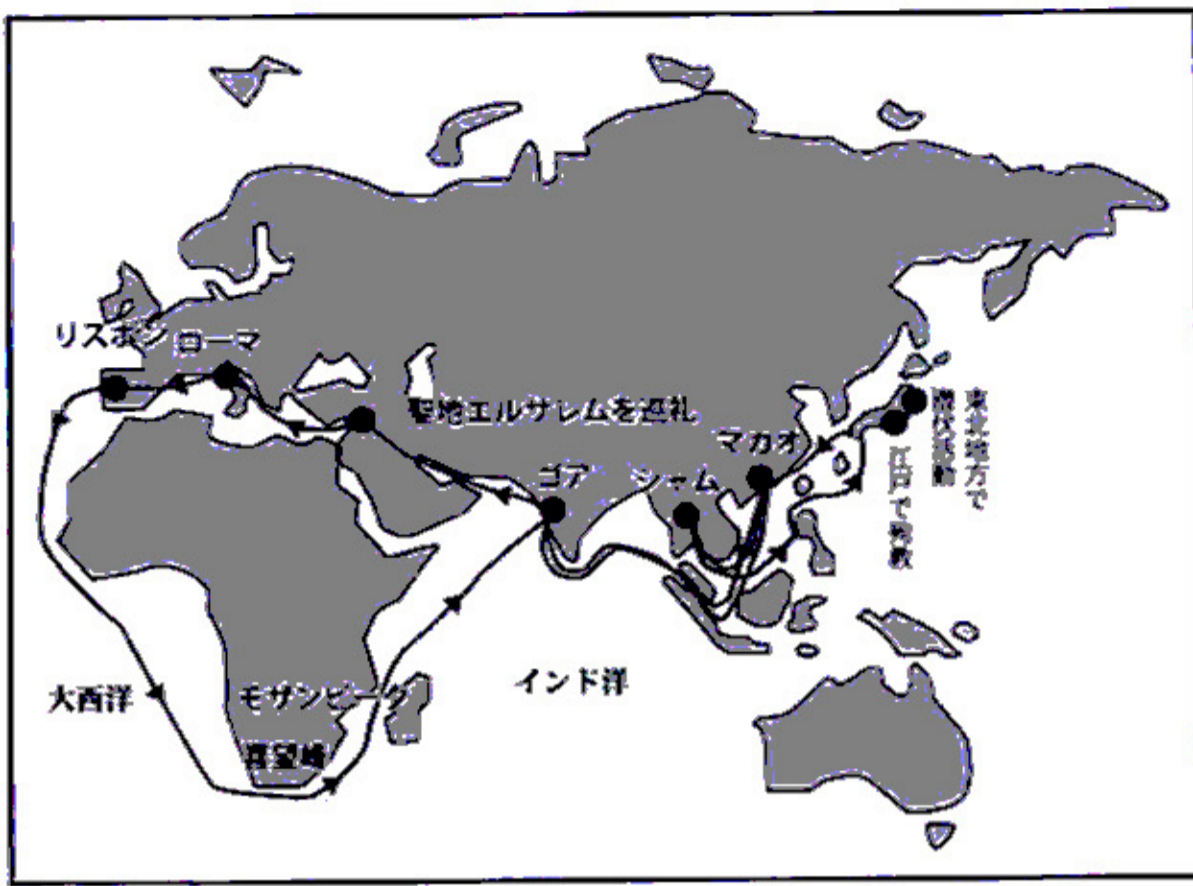
サビエルと結ばれた靈性 〜江戸の殉教者・ペトロ岐部②〜

サビエルによってもたらされたキリスト教信仰。多くの日本人の心をとらえたのか、私にはよく理解できない。庶民だけでなく、キリシタン大名も

殉教者、ペトロ岐部が大分、国東に生まれたのは38年後。両親も洗礼を受けており、彼は13歳の時、長崎のイエズス会の

神学校(セミナリオ)に入り、司祭になりたいと希望する。

サビエルの来日に始まり、江戸初期までの短期



ペトロ岐部が歩んだ道

なぜ育つたのか。私には理解できない。一方で、信仰の自由が認められても人々の信仰への関心が薄いのはなぜだろうか。

ペトロ岐部は司祭になるため、1614年、追放された宣教師とともにマカオに渡る。しかし当時は

日本人神学生への評価は低く、司祭への道は閉ざされていた。そこで彼はまずイエス・キリストの殉教の地、エルサレムに向かう。

記録によると、3年もかかって掲載の道を歩み、その後、ローマのイエズス会を訪れ、ここで初めて司祭への道が開かれる。

現代でも大変な旅であるのに、今から400年前の交通事情の悪い時にこれを現実させたとは、奇跡としか思えない。

岐部とサビエルとの目に見えない結びつきを感じるのは、彼がローマ滞在中の1622年、イエズス会の創立者、イグナチオ・ロヨラとサビエルが列聖された、その列聖式に日本人としてただ1人、参列していることだ。

彼はここで改めて日本にキリスト教を伝えたサビエルの意志を感じ、帰国を決意する。

当時、ローマでも日本のキリスト者の弾圧は伝えられており、帰国することは死につながると

かっけていても、彼は日本の信者のために16年ぶりに帰国する。長崎に密入

国し、京都を経て東北の水沢に拠点を置いて活動したが、1638年、密告により捕らえられ、江戸に送られる。

そして、今もその跡が残る伝馬町牢で穴吊るしにより殉教する。享年52歳。

今回、その跡地に立ち、サビエルが伝えた靈性をひき継いで帰天したペトロ岐部について長く黙想した。

今から400年前の出来事。サビエルが命をかけて日本に伝えたイエス・キリストの福音。それはペトロ岐部により、不転の靈性として今も日本人の間に生き続けているのだろうか。

サビエルを育んだキリスト教信仰。最近はやローマでも信仰離れが目立つという。サビエルやペトロ岐部が命をかけて伝え、守ろうとした信仰。当時に比べると物質的には豊かになり、すべてが便利な世の中になった。

物質的に豊かになると、人は神への関心が薄れ、信仰心は薄れる。イグナチオの靈性を育んだ聖人サビエル、福者ペトロ岐部は特別としても、信仰とは何かと考える。

壁掛けのパウロのテサロニケへの言葉が目に入る。

「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべてのことに感謝しなさい」